

報 告 書

2012年6月 日

東京高等裁判所第17民事部 御中

弁護士 奥 村 秀 二

2012年5月初めに現地を訪問し、控訴人イスワディ（Iswadi 控訴人番号 B.2）の報告書に記載がある、ユリスマワティさん（Yulismawati 原告 B.301）及びヌルハイニさん（Nurhaini 原告 B9）から、旧タンジュン・パウ村での生活状況を聴取しました。

また、マハット川の上流にあるパンカラン・コトバル（Pangkalan Koto Baru）は、コトパンジャンダムによって水没しなかったため、現在も移転前のタンジュン・パウ村と同じ状況を止めています。そこで、旧タンジュン・パウ村の様子を明らかにするための参考として、パンカラン・コトバルの状況を調査しました。

以上の結果を報告します。

第1 ユリスマワティ氏からの聞取

1 私は、旧タンジュン・パウ村のパサール・ブユ地区に住んでいました。自宅は同地区にあるモスクのマハット川側にありました。イスワディさんのお父さんのお母さんが私の姉になりますが、姉の家の隣でした。

私の家族は4人で、私の他に私の母と夫に、子どもが1人でした。

夫は公務員をしていました。母が家にいましたので、私も仕事に出ていました。

2 私の仕事は、ワルンでした。

国道沿いで、モスクや、村役場、小学校が集まったところの近くに店を出していました。ブユ川にかかった国道の橋をプカンバル側に100mほどのところでした。上記のような施設が近いことから、金曜日のモスクでのお祈りの後にはお客さんがよく来てくれました。売上としては、1日に10,000Rpにもならないときもありましたが、30,000Rpを越えるときもありました。月10万Rp位の収入でした。

私のワルンには、イスワディが学校帰りによく来て、おやつを食べていっていました。

3 また、移転前、私は、4haのゴム園を持っていました。

1つのゴム園（2ha）はブユ川の上流にあり、自宅から4kmほど歩いて1時間くら

いのところでした。もう1つのゴム園(2ha)は、ランサット川沿いにあり、ここへはサンパン(小舟)で行きました。距離はやはり4kmほどで1時間ほどで行けました。ゴム園の手入れは私がしていましたが、ゴムの採取は人に頼んでいました。私はゴムの売上の3分の1(これが相場でした)を受け取りました。1つのゴム園で月50,000Rpから60,000Rp位になりましたので、月合計で10万Rpから12万Rpの収入でした。

4 移転前、水田はありませんでしたが、焼畑をしており、陸稲を植えてお米を自家用に作っていました。陸稲だけでは足りないときにはお米を買っていました。

畑があり、長豆、芋、キュウリ、ナス、唐辛子など、自分たちが食べる野菜などは全て作っていました。

朝は、米粉で作ったちまきのようなロントンという伝統料理や、バナナや芋の揚げ物等を食べました。昼はしっかりしたものを食べ、ご飯に、マハット川の魚と野菜等でした。夜もしっかりしており、ご飯に玉子や鶏、魚などを食べました。

食料はほぼ自給しており、買いに行くということはほとんどありませんでした。ただし、塩、砂糖、油は買っていました。

自宅がマハット川に近かったので、飲み水はマハット川から汲んできました。マハット川ではマンディ(水浴び)をしましたが、そのときに川の真ん中まで歩いて行って(川の真ん中でも背が立つほどの深さでした)汲みました。そして家ですぐに沸かして飲み水にしました。ブユ川の水は、上流の人たちが使っていましたので、私たちは使いませんでした。

家畜は、山羊4匹と鶏20羽ほどを飼っていました。山羊は注文に応じて売りました。鶏は自家用以外に注文があったときは売りました。

5 以前の村の生活での楽しみは、歌を歌ったり、劇をしたり、踊ったりということでした。私は



ゴングをならすところ



小さいときからこうしたことが得意で、結婚

式などに呼ばれて、音楽を演奏したり、歌ったり、踊ったりしていました。

右上の写真の楽器は、インドネシア語でラバナ、ミナンカバウ語でグダヤという楽器です。左の写真は、ゴングという大きい鐘です。

音楽を演奏するときは、小さい鐘のターレンポン

と太鼓（ゲンダン）を含め、4人で演奏をしました。

第2 ヌルハイニ氏からの聞取

1 私はパサール・ブユ地区に住んでおり、ワルンを営んでいました。私のワルンは、国道沿いで、ブユ川にかかる橋のパダン側にありました。

ワルンからは、1日 25,000Rp から 30,000Rp の収入があり、仕入れを考えると半分くらいが収入になり月 40 万 Rp 位になりました。この収入で家族が生活をしていくことは十分できました。

移転前は4人家族で、私と夫、子ども1人と祖母でした。もう1人子どもがいましたが、1989年、中学生の時に亡くなりました。

夫は、重機の運搬を請け負う仕事をしており、役所から依頼を受けて仕事をしていました。常に仕事があるわけではありませんでしたが、仕事があるときは月に 15 万 Rp くらいの収入になりました。夫は、移転前に交通事故で亡くなりました。

2 私は、ゴム園を 6ha 持っていました。

内 2ha は家の近くにあり、ゴムの生産ができていました。このゴム園は、人から買ったもので、人に貸して収益の 3 分の 1 をもらっていました。当時、ゴムは 1 日 15kg ほど収穫でき、ゴム 1kg が 400Rp くらいでしたので、私の取分が 1 日 2,000Rp ほど、月にするると 50,000Rp ~ 60,000Rp 位になりました。

残りの 4ha は、Pai Nya Pian というところにあり、マハット川に下流に下ったところで家から歩いて 1 時間くらいでたどり着けました。マハット川から斜面を登ったところに位置していました。1987 年ころに、元々タナウラヤットだったところを分けてもらい、木を焼いて陸稲を 1 年間育ててからゴムの苗木を植えて育てていたところでした。移転時はもう後 1, 2 年で収穫ができるようになるというところでした。

今は、移転によって遠く離れてしまい、手を入れたり収穫したりすることができなくなりました。しかし、この 4ha については補償を受けられませんでした。マハット川から高い位置にあったため水没しなかったからです。当初は、測定の結果水没するといわれ、補償金の支払もするということでしたが、水没していないとして補償金の支払はありませんでした。

3 畑があり、バナナ、芋、野菜などを作り、自給していました。

陸稲も作っており、家族が食べる分は十分まかなえました。ゴム園の整備をした後、夫がマハット川で魚を捕ってきておかずにしていました。

お金を使うのは、普段は、塩、砂糖、油や、子どもの教育費で、ワルンの収入で賄っ

ていました。家を建てる時など大きなお金がいるときは、ゴム園の収入などを貯めたものをあてました。

- 4 5年前に祖母が亡くなり、現在、私の家族は、娘夫婦と、孫が5人います。

今もワルンを営んでいます。以前はゴム園がありましたが、移転後は、支給されたゴム園が失敗し

てゴムの収穫ができません。2000年以降3期にわたってゴム園の再造成がされ、私は第3期にあたり2005年に実施されました。しかし、この第3期では、肥料や害虫対策が行われなかった結果、イノシシに食べられたり、害虫にやられたりしてうまくいっていません。第2期のゴム園造成は70%ほどが成功しています。

このため、ワルンの収入だけで生活しなければならず、以前より生活が大変です。特に孫の1人が障害を持っているため、今後の生活が心配です。



ヌルハイニさんが現在営むワルン



右端がヌルハイニさん

第3 パンカラン・コトバルの状況

1 概要

大木昌氏の論文（甲 B82）にあるとおり、カンパール・カナン川及びマハット川は、古くからスマトラ島内陸部と外部を結ぶ重要な交易ルートでした。同論文（同 620 頁及び 622 頁）によると、19 世紀以降、スマトラ島内陸部（パダン高地）にコーヒー栽培が広まり、パダン高地のパヤクンプから陸路でパンカラン・コトバルに運ばれ、そこで舟に積み替えられ、シンガポールまで運ばれたとのこと。甲 B83 の地図（1902 年に作成されたもの）では、当時、スマトラ島東岸へは道路が発達しておらず河川が交易の中心であったことが窺えます。タンジュン・パウ村の名がこの地図に記載されており、当時から交易の中継地点でした（甲 B62〔グスティ・アスナン論文〕訳 2 頁参照）。

同ルートでは、スマトラ島内陸部から外部に向けて、コーヒーの他、ガンビル（ガンビア）やラタン（ロタン：籐）などの商品が運ばれ、外部からは塩、鉄、綿製品などが運び込まれました（同 629 頁表 2）。こうした交易の中心となったパンカラン・コトバ

ルは、活発な商業活動により裕福な商人層が生み出されていました(同 636 頁～ 638 頁)。

こうした状況は、20 世紀後半に至り、河川を利用した水運からトラック輸送に変わった後も同様です(甲 B84 の日本軍参謀本部の地図〔1944 年〕及び甲 B85 のアメリカ軍の地図〔1954 年〕では甲 B83 に比べて道路が発達してきていることがわかります)。本件プロジェクトの F/S (戊 A6, IV-25 頁)は、パンカラン・コトバル郡の「道路ネットワークは比較的発達し、西スマトラ州の州都パダン及びブキティンギとリアウ州の州都パカンバル、ドマイを結ぶ国道が通過している。この国道を利用し、物流、人口流動が極めて高く、両州の経済、商業活動を強力に支えていると言える」としています(なお、パダン、ブキティンギ、パカンバル、ドマイを結ぶ道路は、甲 B86 の地図を参照)。

本件プロジェクトで被害を受けた各村は、これらの交易ルート上に位置しています。甲 B84 の地図〔1944 年〕には、道路沿いに、タンジュンバリット、タンジュンパウ、ムアラマナト、コタパンジャン、タンジュンアライ、バトゥバスネ、プンカイ、コタトゥア、グヌンホンス、タンジュンなど、本件原告らが移転前に住んでいた村の名が記されています。

以上から、文化的には同じミナンカバウに属するパンカラン・コトバルの状況は、水没する前の原告らの村の状況を検討する上で参考となるものです。



2 クルニア (Kurnia) 氏からの聞取

(1) クルニア氏が住んでいる家は右の写真のような高床式のもので、78 年前に同氏の祖母の兄が建てたものとのことでした。

同氏の家は、パンカラン・コトバルにあるモスクのすぐ奥に位置し、マハット川に面していた。同氏の玄関を出て家の前の道を渡ってまっすぐに行くすぐに川岸に出ます。



写真の左端奥 (▲のところ) にクルニア氏の自宅が小さく映っている

クルニア氏から、同氏的生活状況やパンカラン・コトバルの状況を以下の通り聴取したので報告します。

(2) 私は、1960年にジャカルタで生まれ、しばらくジャカルタにいましたが、1960年代中にはパンカラン・コトバルに生まれました。私は6人兄弟の4番目になります。

曾祖父母の時には水田を持っていたそうですが、私の両親の時には水田は持っておらず、私たち家族は商売をして生活していました。父はプカンバルで商売をしており、母はパンカラン・コトバルで物売をしていました。

私たち家族は、ピトパン・ダトゥ・サビアヨ (Pitopang Datuk Sabiayo) というスク (Suku 氏族) に属しています。私たちのスク

は皆、この近所に住んでおり、全部で200世帯から300世帯ほどあります。当時、私たちのスクでは、農業を

している人たちが大半でした。ゴム、ガンビルを育てて売っていました。また自家用に、水田・畑をしていました。

私の父は、ウラマーといってイスラムのリーダーの地位にありました。

(3) 私が小さいときは、マハット川では舟でガンビルが運ばれていました。

家の隣のモスクの手前の川岸が船着き場となっていました。山の方のガンビル畑で作られたガンビルを、山の人たちがここまで運んできて、ここで舟積みしました。ガンビルは1袋50kg位ずつ袋詰めされ、10袋くらいを1艘の舟に積んでいました。舟は長さ10mくらいで幅が1.5m位でした。

当時、プカンバルに行くのも舟でした。15日ほどかかっていました。



マハット川の岸にモスクがある
(次に述べるタサル氏の自宅手前の川岸から撮影したもの)



モスクの手前の岸の様子



タサール氏自宅近くの家の下に保管してあった舟
(最近は洪水の時にしか使わないとのこと)

昔は、舟が入ると舟を迎える歌を歌ったりしたものでした。私たちのスクの中でも舟の輸送に関わっている人がいました。

1980年代頃からトラック輸送にかわり、舟での輸送は廃れました。仕事としてもトラックの運転手になる人が増えました。

(4) 私の家は、スクの中では生活が苦しい方でしたが、高校まで行きました。私のクラスで8割くらいは高校に進学しました。当時高校はパヤクンプにしかありませんでしたので、私は、パヤクンプ

に下宿して通いました。ただ、生活が苦しかったので、お金が無いときは休学しましたので、私が高校を卒業できたのは23歳の時でした。

同級生の中には、リアウ大学やアンダラス大学、パダン教育大学などの大学に進学する人もいました。大学に行った人は女性の方が多かったです。

私は、高校卒業後しばらく家で母の手伝いをし、その後、ジャカルタにいた姉のところへ5年ほど家の手伝いをした後、再びパンカラン・コトバルにかえってきて父が引き合わせた夫と結婚し、この家で暮らしてきました。

夫との間には、現在大学生と高校生の子ども2人をもうけました。夫は既に他界しましたが、父と同様の商売を営んでいました。まあまあ生活を送ることができてきたと思います。

3 タサール (Tasar) 氏からの聞取

(1) クルニア氏は、商業を営む家族であったため、次に、主要産業であった農業を営んできたタサール氏から生活状況等を聞きました。

同氏の自宅もマハット川沿いにあり、クルニア氏の自宅の対岸に位置していま



左側がタサール氏の自宅(上写真) 右奥にも同様の家が並んでいた(次頁写真)

した。

国道から脇道に入り少し川の上流
に行ったところにありました。

タサール氏から聴取した内容は以
下の通りです。

(2) 私は 1949 年に生まれました。

父は 5ha のゴム園を持っています

たが、私が 11 歳の時に父が亡くなり、母がゴム園の管理をするようになりました。

私は、19 歳の時にニニック・ママックをしていた叔父から、タナウラヤット 4ha を分けてもらってゴム園を始めました。まず最初はタナウラヤットを焼き、そこに陸稲を植え、その収穫が終わってからゴムの苗を植えました。収穫できるまでには 7 年かかりますので、それまでは他の人のゴム園の手伝いをしました。23 歳のときに母が管理していたゴム園を譲り受け、自分のゴム園として手入れやゴムの採取を始めました。そして、25 歳頃、自分が植えたゴム園 4ha からゴムの採取ができるようになりました。

こうしたことから 26 歳の時に結婚しました。

その後、自分で植えた 4ha のゴム園を広げ、現在では 5ha になりました。

ゴム園からの収穫については、一部は他の人に頼んでいます。人に頼んだ分については、収穫の 3 分の 1 が私の取り分で残りは収穫した人のものとなります。

(3) 私は 9 人の子どもをもうけました。

一番上は 34 歳（長女）でバタム島で専門学校を出て助産婦をしています。孫がおり、その世話のため妻が長女のところに行っています。2 番目から 4 番目は男でいずれも高卒でトラックの運転手をしています。5 番目は 4 男ですが

現在リアウ大学に進学しています。6 番目は次女でイスラム大学に通っています。7 番目の 5 男は専門高校に行っています。8 番目は女の子でしたが亡くなりました。9 番目の 4 女は現在小学校 6 年生です。今私が同居しているのは 5 男と 4 女の 2 人です。

現在の自宅は、33 年前から建築をはじめ、3、4 年ほどかけ、1989 年 2 月 29 日に完成しました。完成した日は記念に記していますのではっきりしています。建築に使った石や砂は、前のマハット川から取ってくるなど、家族と一緒に建てました。

私には、上述したゴム園の他、水田が約 1.5ha あり、お米はその収穫で自給してい



マハット川に架かる橋の橋脚のところで今日でも砂や石の採取が行われていた（モスク前の川岸から撮影）

ました。畑は無く、野菜類は購入していました。



タサール氏の水田がある地区。奥に見える木々の向こう側にマハット川がある。マハット川の水面は水田より低いため、この水田には近くの小川から水を引いてきている。左下の写真はその用水路である。



家畜としては、昔は水牛を 6 頭飼っており、2 頭は農耕用、4 頭は飼育して売るためでした。水牛の売却代金は子どもの教育費に使いました。15 年ほど前まで飼っていましたが、1990 年代になり洪水が激しくなり、15 年ほど前に水牛を飼っていた川岸の土地が川の流れて削り取られてしまったため、その後は水牛を飼っていません。

10 年ほど前、家の前に池を作り、魚の養殖を始めましたが、洪水で流されたりしましたので今は止めました。

ゴム園の収入に加えてこうした収穫や収入で家族を養ってきました。

(4) パンカラシ・コトバルでは、ミナンカバウの伝統は今でも生きています。

断食月の前にはモスクの前で水浴びをし、断食月の前後には、小舟の競争や、竹登り競争があります。またイスラムの行事で舟をきれいに飾ってお祝いをする行事もあります。これは各地区ごとに 1 つの舟を飾ります。コインをミカンに差し込み、口だけでこれを取るという行事もあります。

ミナンカバウ語の弁論大会もあります。これは断食月の前に行い、これが終わると断食に入ります。

断食が終わった後は、各地域でお祭りをします。スラウ（各地区にある小さいモス



▲の位置にタサール氏が水牛を飼っていた川岸があった。その右手奥にタサール氏の自宅がある（モスク前の川岸から撮影したもの）



タサール氏の養魚池の跡（左端にある小さな小屋はトイレである）

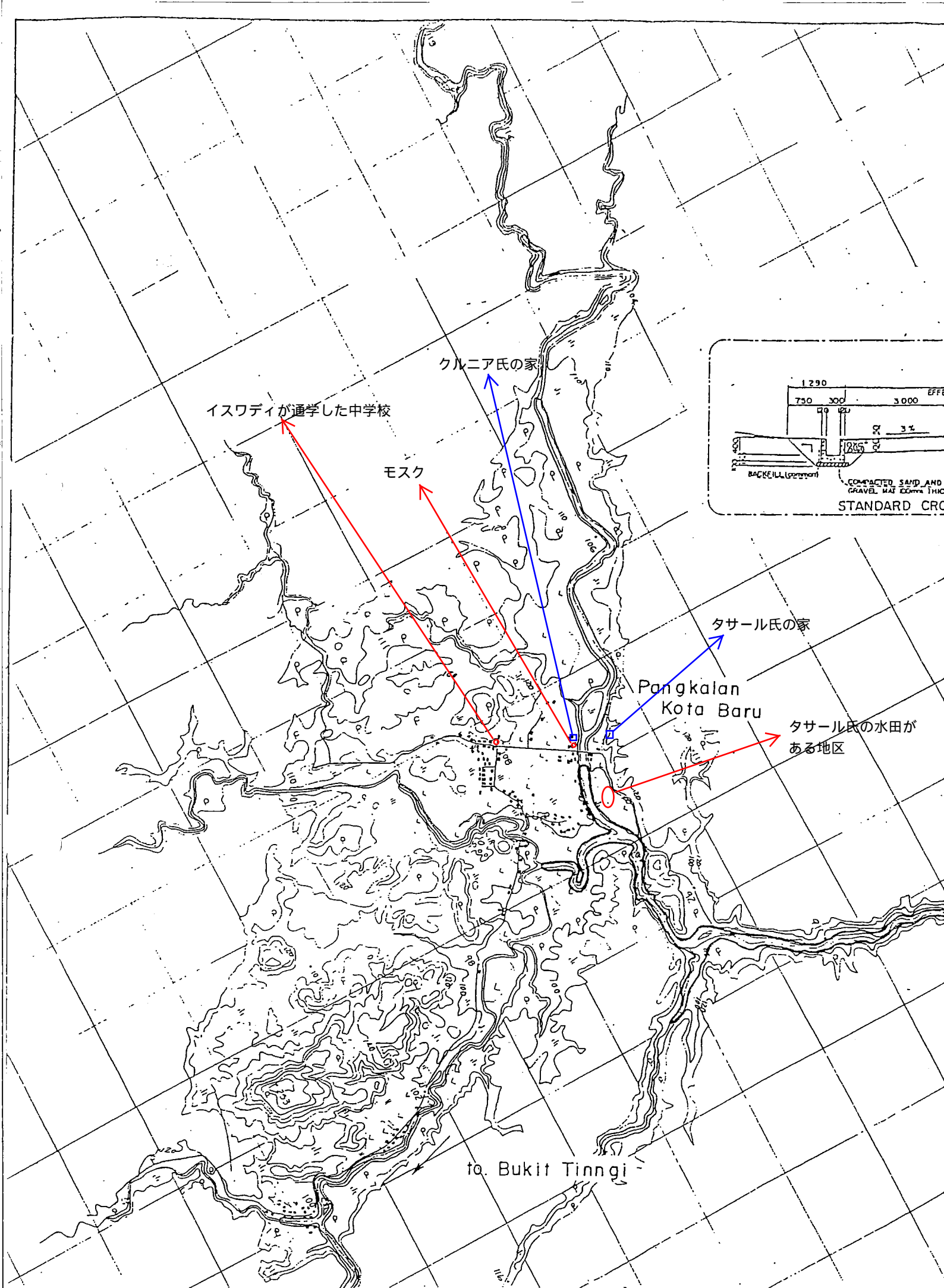
ク) でコーランの読経競争、アラブ語の習字コンテスト、イスラムの歌のコンテストなどです。いずれも村中が1つになって楽しめます。

子どもが生まれたときにはトゥールンマンディをします。私の子どもたちも全員しました。

(5) この20, 30年の間にはインドネシアでもいろいろな出来事ありましたが、私の生活としては上記の通りであり、特に変わっていません。

父から受け継いだゴム園と自分で苗を植えて育てたゴム園からの収入で、家族を養い家を建て生活を送ってきました。

以 上



イスワディが通学した中学校

クルニア氏の家

モスク

タサール氏の家

Pangkalan
Kota Baru

タサール氏の水田が
ある地区

ta. Bukit Tinggi

